

オプション教材ギンナン 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

1.

2.

3.

4.

5.

第二に、通常の人間の生理的条件が同じだとして、つまり共通の感官に束縛されているとして、その共通性のゆえに、すべての事実、すべての人間にとって共通であろうか。明らかに、そうではない。健全な視覚を備えた二人の人間がいたとして、その眼前にプロジェクターを通して一枚のスライドが写されている。そのスライドには、美しい紋様が現われている。一方の人間はヴェテランの医師であり、彼は、その紋様を、恐ろしいペスト菌と見ている。もう一方の人間は、顕微鏡や染色技術にはまったくうとい人物で、スクリーン上の紋様を、超現代派の絵画の一種と見ている。この二人の視覚、網膜上の昂奮の状態はあるいはほとんど完全に同じであるかもしれない。しかし、この二人にとって、眼前の「事実」は、明らかに違っている。

(中略)
こうして、「事実」は、それを受け取る人間の置かれた「内的状態」すなわち「知識」と、「外的状態」すなわち「コンテクスト」とに依存する。このことは、観察ということが、単に、ある人間の網膜にある刺激が与えられて昂奮が起こった、ということの意味するものとして捉えられるべきではなく、端的にその人間の総体としてしか捉えられない、ということをはつきり示している。

第三には、言語のもつ束縛がある。「事実」は、観察されただけでは、まだ私的体験である。それは、何らかの伝達手段を使って言表されなければならない。その最も精妙な手段が言語であることは言を俟たない。しかしその伝達手段は、逆に「事実」そのものに鑄型を与え、規制し、束縛することも認めねばなるまい。

よく知られている事実だが、語彙の少ないことで著名なイヌイットには、雪の状態に関して、われわれよりはるかに多くの表現があつて、われわれには区別がつかないような微妙な差異を言い表わすことができる。そうしたことをもったイヌイットとわれわれの間

に起こる、雪についての「事実」の相違は、おのずから明らかである。

このように考えてみると、「事実」というものは、幾重にも、さまざまな枠組みによって束縛されていることがわかるであろう。多少結論めいた言い方をすれば、「事実」とは「事実」の世界への可能性として存在する「自然」から、人間が、さまざまな枠組み、型、鑄型をあてがうことによって選りとり、可能的多様体を現実的単様体へと収斂させることによって造り出されるものである。「事実」とは、そうしたやり方で選りとりられたものであり、選りとるための

枠組み、鑄型に従って、変化するのである。

この結論は別段目新しいものではなく、デユナミスとエネルギーを区別したアリストテレスの昔から、繰り返し繰り返し、いろいろな形で語られてきた哲学的態度である。それをあらためてここで確認した理由は、自然科学が「客観的」で、それ以外には「自然との関わり合い方」があり得ない、という反論に対する再反論の根拠をそこに見出したかったからにはほかならない。

つまり、近代自然科学というのは、上に述べた意味で、一つの枠組み、一つの鑄型であつて、われわれは、そうした枠組み、鑄型を使って、可能的多様体としての自然から、一つの「事実」の世界を選りとり、構築し、それを「現実」の世界として、その上に「自然科学的世界像」を打ち建てているのである。

(村上陽一郎『西欧近代科学(新版)』による)



最近、本の真贋、テクストの真実と虚偽の問題について、考えることがある。

これは一つには、還暦も近づいてきて、人生が思いのほか早く過ぎ去ることに遅まきながら気づき始め、それに比べて読むべきテクストの数が依然、あまりに多いことを託ちだしたからにほかならない。

試みに数えてみる。あと、何冊の本が読めるのだろうか、と。仮に平均寿命まで、目も頭も気力もそれほど衰えないで読み続けられたとしても、読書という名に値する読み方で読める本の数は、千冊くらいに過ぎないのではないだろうか。確かに専門の分野で研究史を概観し纏めるときは、一日に数冊のペースで大意を取る速読をしたり、勤めていた大学で卒論・修論・博論の審査の時期にも集中的に大量に読む。また、トイレにおいてある本を、毎日少しずつ読み進む悪習もある。しかしそれらは読書と呼べるだろうか。それらを除外して、味わいながら行間に入り込んで読む本の数を指折ってみると、一週間で一冊、つまり一年で五十冊、二十年でたつた千冊といった数字が浮かんでくる。『聖書』も一冊、『純粹理性批判』も一冊というふうに数えて均すならば、この数字は必ずしも控えめに過ぎると思えないのである。この伝でいくと、学に志す十有五歳から耳順う六十歳までに読める本の数も、二千冊を少し超える程度に過ぎない。よく「万卷の書を読破した碩学」といった言い方をするけれど、ものを考えない人ほどたくさん本を読むというショーペンハウアーの逆説も考えあわせると、ほとんど無意味な数字のように思える。

読める量がこのように限られている限り、読む一冊一冊の質を高めろほかはないだろう。すなわち、なるべく効率的にホンモノと出会いたい。それで本の真贋といったことが問題になってくる。

(中略)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

そこで振り出しに戻ることになる。真贋をどうやって見分けるか。向田邦子の小編に、信頼できる美術商からホンモノとニセモノを見分けるコツを聞き出している文章がある。それによれば、答えは一言、「あたたかさ」があるか否か。すなわち、ホンモノには美そのものの愛がある。だから温かい。ニセモノにはそれが無いので冷たい、ということであろう。確かにニセモノは、それで一儲けしようという金への愛はあるかもしれないけれど、美そのものの愛を本質的に欠いているだろう。その温度差が、真贋を見分ける基準となる。これは言い得て妙な真贋判別法であつて、そのまま本の真贋にもある程度当てはまるように思われる。

哲学とはフィロソフィア・知への愛であり、哲学に限らずホンモノのテクストは知への愛、何らかの価値への熱い思いをもっているはずであり、その意味で本質的に温かい。それに比べ、業績作り、金儲け、頼まれ仕事、勉強覚え書き、研究で溜まったものの排泄作用、等々のためだけに書かれた本は、どこか冷たいだろう。そういう視点からホンモノを見分け、そしてそのホンモノを、我々自身、知への愛をもつて、すなわち温かさをもつて、熱をもつて、読み解いていく。それ以外に、真贋ということはないのかも知れない。思えば一つの著書の中で、そのような熱のある箇所は限られているかも知れず、またニセモノにもどこかに熱い部分が隠れている場合もあるかも知れず、結局、真贋虚実入り交じつての聞き合ひの中で、こちらの温かさに応じてホンモノが現出してくるという体のものかも知れない。骨董屋に「信用がつくに従い、彼の茶碗が美しくな」るものであり、結局「鑑賞も一種の創作だ」という小林の言は、この間の事情を言い当てたものにほかならないだろう。

(関根清三「本の真贋」による)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

日本には室町時代からずっと受継がれ、代々磨きぬかれてきた職人のわざ、芸、技術と、それを担ってきた職人たちの作法があった。職種は大工、建具、屋根、左官、畳屋、経師屋と異なっているが、彼らは家を建てるという一つの目的のもとに集った職業集団であり、技を競いあう建築のプロであった。職人の誇りが彼らを支えていた。人が見ていようがいまいがプロとしての誇りを満足させる仕事をするのが、彼らの心意気であったのだ。日本にはそういう完成しきった職人というプロの型があった。

が、それも一九六〇年代に商品としての家屋が出現して以来、急速にこわれつつある。昔は大工たちが作る家屋は百年、二百年と代々の人間が住めることを前提にできたものだだったが、商品としての家屋は見てくれのよさを第一に置き、永続を念頭におかず、せいぜい一代三十年（実際には二十年くらいでダメになる）もてばよいとして作られたものだ。レディーメイドの工場製品であるから、プロの技術を必要とせず、素人や半端職人がマニュアルどおりに組立てていけば完成する。この商品としての家屋が主流となったために、五百年もつづいた日本の職人芸はいまや滅亡寸前のところまで追いこまれているのである。注文主は無名の大工に頼んで伝統的家屋を作るより、有名な大工社の恰好のいい既成品を信用し好むようになったからだ。当然ながらそこには完成した職人の技術はなく、それとともに職人の心意気も作法も失われた。人間の行動の上の型が失われたのと同じように、仕事の型も、仕事をする工作人の作法もなくなってしまう。

型として厳然とあった職人の技術と作法とが失われた背景には、ここでも日本の高度経済成長時代の影響があったことがわかる。家屋の大量生産による商品化と、工場による生産、建築技法のマニュアル化といった現象が、五百年来つづいたこの国の建築技術とそれを担う職人とを衰退させた。型の文化は破壊され、職人のマナーも失われた。つまりここでも社会の生産構造の変化が古き伝統文化

を壊し、それに代る新しい作法を作るにいたらなかった事実が、目に見える形で起っていたのである。いまあの昔ながらの職人氣質がこの国のどこに生きているだろう。現代社会のいろんな面でそういうふうな、経済構造の大変化のために人間の生き方の型がこわされてしまった。古い価値観が破壊され、それに代る新しい柱がたてられぬままぐらいつているのが現代だと言えない。

『ハムレット』第一幕第五場の終りに、ハムレットの科白として、
The time is out of joint.

（小田島雄志訳「今の世のなか関節がはずれている。」、木下順二訳「今は世の中の関節が外れている。」）

とある。現代は世界中どこでもこの言葉のようになってしまっているようだが、中でもとくにわが日本は戦後五十年のあいだに今までのこの国人の生き方を支えてきた関節がすべてはずれたまま、新しい関節の構造は作られずに、がたがたぐらしたままになっているかの如くだ。それが一方では政治家や官僚や経済人やの汚職、腐敗といった倫理的退廃としてあらわれ、一方では社会全体における倫理観と作法の喪失となつてあらわれているのであろう。そしていわゆるバブル景気が破裂して経済全体がしぼんでしまった現在ようやく人の目につきだし、こわされたものに代る新しい社会構造と、その中で人間の生きる型とが求められだしたということなのであろう。必要なのは新しい価値体系であり、新しい倫理観である。倫理という関節をも一度組み立て直さなければ、日本というからだ全体が再生することは不可能だという状態に、いまわれわれは置かれている。家は柱がなければ立たぬように、人間を人間たらしめるのは倫理なのだから。

（中野孝次の文章による）



日本人は記録魔だ、と言う人がある。何でも、やたらにメモをとる、記録しておく。何のためということはない。おもしろそうなことも、おもしろくなさそうなことも、無差別に記録してしまう。事実がそこにあるからであろう。こういう記録魔のところが、かえって日本に歴史らしい歴史の発達をおくらせることになった。歴史には史観という倫理が必要で、がらくたの骨董屋のような人間は歴史家になることができない。

思想の「体系」もない。しっかりと固定した視点もない。ただ見聞を黙々と記録する。そして、記録するかたっぱしから、忘れ去られるのにまかせている。記録を史観で貫いて不朽のものにしようなどとは考えない。しかし、このことが案外、創造のためにはプラスになるのである。むやみと記録し、たちまち忘却のなかへ棄てざる。記録にとられない。去るものは追わずに忘れてしまう。そういう人間の頭はいつも白紙のように、きれいで、こだわりがない。

日本人は無常という仏教観が好きだが、頭の中にも、無常の風が吹いていて、しっかりと体系の構築を妨げている。しかし、へたに建物が立っていない空地だから、新しいものを建てるのに便利である、とも言えるのである。

日本語はどうも、俳句や短篇や珠玉のような随筆に見られる点的思考に適している。逆に、大思想を支えるような線的思考の持久力には欠けている。しかし、持続力はときによくない先入主となって、精神の自由な躍動をじやますることがないとは言えない。「ひらめき」をもつのは、日本語はなかなか都合なのである。

このごろ、やたらに、対話だとかコミュニケーションだとかが騒がれているが、元来、日本人は多言、雄弁をきらい、沈黙の言語を深いものと感ずるセンスをもっている。巧言令色スクナシ仁。そして、問答無用。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ほかの人間と議論して、正と反との葛藤の中から合という中正を見つけていこうという弁証法のような考え方は、日本人はもともと無縁である。日本にレトリック（修辞学）や弁論術が発達しなかったのは当然であろう。対話によって思考を展開するのではなくて、独白、あるいは詠嘆によって、最終的な形の思考を、投げ出すように表現するのが日本的発想である。

言いかえると、日本人は言語を使用しながら、ともすれば、伝達拒否の姿勢をとりやすい。他人のちよつとした言葉にも傷つく繊細さをもっていることもあつて、自分の殻にこもつて内攻する。発散しない表現のエネルギーは鬱積して「腹ふくるるわざ」になるが、いよいよもつて抑えられなくなると、爆発するのである。

宗教における悟道、啓示というのもこの範疇に入れて考えてよい。喫茶店で友人とコーヒーをすすりながら悟りをひらく、というようなことは考えにくい。やはり、面壁九年の修行の方がオーソドックスというものである。日本語は、どうも出家的創造性に適していると言うことが出来そうである。論理に行きづまった西欧の知識人が、禅に絶大な魅力を見出しているのも故なしとは言えないように思われる。

出家的創造は、対話的発想による論理のように持続はしないが、高压にまで圧縮されたエネルギーが爆発するときの力には、天地の様相を一変させるものすごさがあることも忘れてはならない。

日本語が、いわゆる論理的でないと言われる、まさにその点に、日本語の創造的性質が存するということは、われわれを勇気づけるに足る逆説である。

（外山滋比古「日本語と創造性」による）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ウィリアム・ジェイムズのことばで「楽しかった思い出ほどわびしいものはない。苦しかった思い出ほど楽しいものはない」というのがあります。このことばは、感情について非常にみごとな洞察を示しています。

ぼくたちは楽しかったときの情景は思い出すことができます。しかし、それはすでに対象化されてしまっていて、そのとき自分の中に起きている感情は、過去に自分が楽しかったという事実をかえりみている現在の自分の感じではないんです。過去が楽しかっただけに、思い出している現在のわびしさは色濃くなるのは当然です。

苦しかった思い出も同じですね。軍隊生活をした人間が、あのころはひどい目にあつた、靴の裏までなめさせられたよ、アハハハハなんて、しあわせそうに喋っているけれども、それは思い出だから楽しいのであつて、軍隊生活が楽しかったなどと思われたら大変な迷惑なんです。

一見、再生できるかに思われる感情は、恥の感じですよ。しかし、考えてみると、こういうことがわかります。あなたの家に昔出入りしていた老人がいて、「りっぱな女性におなりになった。でも、あなたは私の膝をよく濡らしたもんですよ」と言われても、あなたは別に

恥ずかしいとは感じないでしょう。けれども、高校時代などに言わなくともいいことを言ってしまったことを思い出したりすると、ひとりでも、赤面したり、貧乏ゆすりをしたりしてしまう。それでは過去の感情を再生産することができたのかといえ、違ふんです。その当時自分の心を傷つけた事実が、現在の自分をも傷つけているということであつて、再生ではありません。思い出すたびに、現在の自我が恥じ入っているんです。

そういう点で、感情がそのままよみがえつたと思われる場合というのは、現在の自我がそのころの自我に連続している場合にかぎりません。

こういう言い方は、しかし、ぼくたち自身にはね返ってきます。ぼくたちが戦地の思い出とか軍隊生活を軽い気持ちで笑えるというのは、一体なぜなのだろうか。軍隊時代に犯した自分の恥すべき行為をなぜニヤニヤしながら思い出せるのかといえ、それは当時の体験が現在の自我とつながってないからだということになります。

いわば仮装行列のつもりで悪いことをしてきた。こういうふうには、仮装をした自分ならば悪いこともできるという自我構造が、いいて言え、日本人の精神構造の特徴ではないでしょうか。ほかの民族に共通性があるかないかは別として、私たちが注目しなければならぬ特徴だと思ふのです。

それはおそらく「場所柄教育」のせいではないかとも思います。「今は酒の席だから」とか「おばあちやまがいらつしやる前で何ですか……」とか「あのときは先生がおいでになったから申し上げませんでしたけど」というように、その場その場でふさわしい切り札を出す。そのいずれの場においても乾孝であり続けようとするのは、我が強すぎる、自我に拘泥しているというので、身分社会では悪だったのです。それが、戦後四十年たった日本の家庭教育はまだそういう段階なんじゃないでしょうか。

それが自我の一貫性を育てない。むしろ、一貫性を欠いてその場その場にふさわしい切り札を使い分けられる子が、「しつけのいいお子さんだ」と言われてきたということが問題なのです。

でつち上げ事件（フレイムアップ）は世界中にあります、その内容が取調べ官の言うなりに答えてしまう率は、日本人が非常に多いそうです。これは日本の拷問の技術が進んでいるからとか、白人のように心の中にキリストを持っていないからだという言い方は間違いだと思ひます。そうではなくて、いろいろな人間関係の中で自分自身であり続けることが認められてきた社会と、自分自身であり続けることが非難される社会、その自我構造の違いだと思ふんです。

（乾孝『信頼の構造』より）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

論文「忠誠と反逆」(一九六〇年二月)のころから丸山眞男は、理想の姿としての「主体」よりも、あるがままの個人としての「自我」に視線を定めて、議論を展開するようになってゆく。そして、その自我は内部に亀裂を抱え、不安定に揺れ動いている。安東仁兵衛との対談「梅本克己の思い出」(一九七九年)で丸山は、みずからが立脚する「西欧的な個人主義」が、実は深い困難にぶつかることを告白するのである。

伝統的個人主義をいわゆる原子的な個人主義として見れば、全ての人間に備わっている理性というようなものによってくくられてしまふ。ですから、啓蒙の個人主義をつきつめていくと類的人間になるんですよ。そういう普遍的理性によってくくられない個、ギリギリの、世界に同じ人間は二人とないという個性の自由は、むしろ、啓蒙的個人主義に抵抗したロマン主義が依拠した「個」です。この西欧的な個人主義に内在する矛盾の問題はぼく自身も解決がつかない。

(中略)

いまや、政治体制の側も、それに対する批判者の側も、みずからの正当性を支える確固とした「原理」をもたず、それぞれに曖昧な一体感のうちにただよっている。それは、人々の自我が、(内なる相剋の意識)を失い、陰影を欠く平板なものになった結果でもある。丸山は、明治後期からの日本のこの状況に対して、むしろ内部の分裂こそが、自我に輪郭と活動力を与えていた、武士たちの精神を想起する。そうした歴史の描きなおしを通じて、現代人が直面している難問を、新たに照らした。

さらに、現代の情報洪水の中で、目に見えない画一化の作用にさらされながら、みずからの「個」としての独自性を保ち、しかも欲望に押し流されずに、適切な「政治的判断」を働かせることは、いかにすれば可能になるのだろうか。そこで丸山がぎりぎりの期待を

かけるのは、「他者感覚」にほかならない。一九六一年の論文「現代における人間と政治」では、チャールズ・チャップリンの映画『独裁者』(一九四〇年)にある、飛行機にのり雲海の中をゆく主人公が、機体が上下さかさまになっているのに気づかない場面をとりあげて、実は人間がこうした「逆さの世界」に住んでいるのがいまや常態であり、現代とは「人間と社会との関係そのものが根本的に倒錯している時代」にほかならないと述べている。つまり、国家やさまざまな組織の「内側」に属し、その内部だけに浸透するイデオロギーや「常識」によって、世界を見る目がはじめから一定の「イメージ」の眼鏡をかぶせられているのである。

では、そのイメージによる境界線をこえ、「外側」の住人の声にも耳を傾けられるようになるには、どうすればいいのか。だれもが自分の属する世界の外に出て、人類全体の共通空間で語り合えるという理想論は、すでに「逆さの世界」に生きていることを前提とする丸山のとるところではない。人間に残されている道は、あくまでも「内側」にとどまっていることを自覚しながら、外との「境界」の上に立ちつづけることである。――「境界に住むことの意味は、内側の住人と「実感」を頒ち合いながら、しかも不断に「外」との交通を保ち、内側のイメージの自己累積による固定化をたえず積極的につきくずすことにある」。

こうして、「他者をあくまで他者としながら、しかも他者をその他在において理解する」ことを、丸山は呼びかける。現にある自分から理想の「主体」へと飛翔するのではなく、「内側」に身をおきながら、少しでも「外」へと視線をのばし、コミュニケーションを続けていくこと。この現実の自我による、「他者」にむけた水平次元での営みが、重要な鍵になる。

(荻部直『丸山眞男―リベラリストの肖像』による)



こう考えると、人類にとって平等は実現できないばかりか、あるいは不必要な価値ではないかという疑いも芽生えてくる。もちろん極端な貧困者を生まないために、一定の所得再配分は不可欠だし、不正な蓄財を防止すべきこともいうまでもない。だがそのうえで必要なのは、じつは格差のない社会ではなく、人が不平等を痛感しない社会であり、自己蔑視や他人への嫉妬に苛まれない社会ではないだろうか。そしてもしそうだとすれば、われわれは二つの予想によって、未来に多少の希望を抱くことができるかもしれない。

第一の予想は、二十一世紀の富裕層が従来にまして不安定であり、はかない偶然に支配されるということである。先端を切る知識産業は、内容が投機であれ企画や発明であれ、人知では計れない運命に左右される。固定資産と巨大組織に基礎を置いて、成功すれば果実を維持しやすい工業社会の富裕層とは違うのである。

ベンチャーは文字通りの冒険であり、情報の創造は芸術制作と同じように成功の持続を保証しない。しかも工業の大企業のなかでも今後は能力主義が強まるとすれば、今日の勝者が明日の敗者になる危険は明らかに高まる。このことは将来の富裕層を謙虚にしないまでも、少なくとも、彼らを見る世間の嫉妬の目をやわらげることを予想させるだろう。

第二の予想は、現在のサービス産業がさらに多様化し、とくに消費者に触れる対人職業が隆盛を見せるだろうということである。流通や娯楽、医療や教育の現業部門、製造業なら商品の修理や保全を行う部門、伝統的な職人仕事と呼ばれる職業がこれにあたる。拙著『大分裂の時代』に詳しく書いたが、市場の世界化、巨大化が進むほど、不安な消費者は信用を求めて身近な小市場に頼ることが考えられる。物資消費から時間消費へ移る昨今の嗜好の趨勢も、対人サービスの需要を増大するだろう。さらに環境、資源保護の点から見ても、商品の修理や保全、リサイクルへの要求は強まるだろう。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

うし、それに応えるには個別的なきめ細かなサービスが必要になる。こうした対人職業の特色は、それが顔の見える人間関係をつくり、そこで消費者の評判を感じ、他人の「認知」に励まされて働く職業だという点である。仕事によって小共同体を組織し、情緒的にも帰属感を覚えやすい職業だということである。本来、人間はたんに所得によつてではなく、他人の認知によつて生きがいを感じる動物であつた。嫉妬や自己蔑視の原因は、しばしば富の格差よりも、何者かとして他人に認められないことに根ざしていた。これに対して、二十世紀の大衆社会は万人を見知らぬ存在に変え、具体的な相互認知を感じにくい社会を生んだ。隣人の見えにくい社会では、遠い派手な存在が目立つことになり、これが人の目を「富裕層」や「特権階級」にひきつける結果を招いた。ジャーナリズムの煽情も手伝つて、嫉妬の対象がたえず再生産される構造が生まれたのである。

こう考えれば今、急がれるのは社会の「視線」の転換であり、他人の注目を受ける人間の分散であることがわかる。普通の人間が求める認知は名声ではなく、無限大の世界での認知ではない。むしろ人は自らが価値を認め、敬愛する少数の相手に認められてこそ幸福を覚える。必要なのは、それを可能にする場を確保することである。

そしてそういう場の可能性も見え始めている現在、残るは社会の価値観の一層の転換であろう。サービス産業の中で高度情報技術だけが注目される世論を改め、多様な対人職業のイメージを高めることである。すでにそれは料理人のような職業では見られることであるから、さまざまな教育手段によつてこの転換を助けることは夢ではないはずである。

(山崎正和『世紀を読む』による)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

俗に言う重箱のすみを突つつくたぐいの学術論文は別にして、歴史書を書くほどの人は学者でも、ということとは世界的に有名な大学の教授の地位にある研究者でも、その人たちの歴史著作を読めば、必ずしも「イフ」は禁句ではないということがわかる。

もちろん彼らでも、カエサルがブルータスらに殺されずにあと十年生きていたら、ローマはどうなっていたか、とは書かない。しかし、カエサルの暗殺以後のローマの分析は、「イフ」的な思考を経ないかぎり到達不可能な分析になっている。ということは、書かなくても頭の中では考えていたということである。

では、専門の学者でもなぜ、「イフ」を頭の中だけにしてももてあそぶのか。

それは、歴史を学んだり楽しんだりする知的行為の意義の半ばが、「イフ」的思考にあるからである。ちなみに残りの半ばは、知識を増やすことにある。「誰が」、「いつ」、「どこで」、「何を」、「いかに」、行ったか、だけを書くならば、今や流行りのインターネットでも駆使して、世界中の大学や研究所からデータを集めまければ簡単に書ける。ところが史書が簡単に書けないのは、これらに加えて「なぜ」に肉迫しなければならぬからである。

ギボンは、『ローマ帝国衰亡史』の最後を、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルの陥落で終えた。だが、五十余日にわたった攻防戦を日々刻々記録したあるヴェネツィアの医師が残した史料は、ギボンの死んだ後で発見されたのである。それを基にして今世紀、現在では世界的権威とされているランシマン著の『コンスタンティノープルの陥落』が書かれたのだった。

この二書を読み比べてみると、たしかにランシマンの著作のほうに、五十余日の移り変わりが明確になっている。だが、本質的にはまったく差はない。ギボンの鋭く深い史観は、一級史料なしでも歴史の本質への肉迫を可能にしたのである。つまり、「なぜ」の考察に関しては、データの量はおろか質でさえも、決定要因にはならないということだ。歴史書の良否を決するのは、「なぜ」にどれほど

肉迫できたか、に付きると私は確信している。

そして、史書の良否に加えて史書の魅力の面でも、「なぜ」は大変に重要だ。誰が、いつ、どこで、何を、いかに、まではデータに属するが、それゆえに著者から読者への一方通行にならざるをえないが、「なぜ」になつてはじめて、読者も参加してくるからである。その理由は、「なぜ」のみが書く側の全知力を投入しての判断、つまり、勝負であるために、読む側も全知力を投入して、考えるという知的作業に参加することになるからだ。書物の魅力は、絶対に著者からの一方通行では生れない。読者も、感動とか知的刺激を受けるとかで、「参加」するからこそ生れるのである。

そこで、「なぜ」という著者・読者双方にとつての知的作業には、必然的に「イフ」的な思考法が必要になってくる。

私の言いたいのは、なぜ信長は本能寺で死なねばならなかったのか、の「なぜ」ではなく、生前の信長はなぜ、これこれしかじかの政策を考え実行したのか、に肉迫する「なぜ」である。

それには、信長の立場に立つて考えることが必要だ。彼だって、本能寺で死ぬとは予想していなかったのだから。ゆえに、もしも信長があそこで死なずに十年生きていたら、と考えることではじめて、生きていた頃の信長の意図に肉迫できるようになる。反対に「イフ」的思考を排除すると、話は本能寺で終ってしまい、日本史上空前の政策家信長の真意も、連続する線上で捕えることが困難になってしまうのだ。

われわれは大学から給料をもらっている身でもないし、それゆえに学術論文を書く義務もない。彼らが禁句にしているからといって、われわれまでが恐縮して従う必要はないのである。歴史を、著者・読者双方ともが生きる現代に活かすのにも、「イフ」的思考は有効である。

(塩野七生「『イフ』的思考のすすめ」)



しかしマキャベリの二重倫理のあまりにも直截な提示は、当時のヨーロッパ人にとっても衝撃であり、そのまま受けとめるには過酷すぎるものであった。そこでマキャベリ以降の政治思想のかなりの部分が、その政治倫理の二重性をいかに緩和するかという点に関心を寄せたのである。そこでよく用いられたのはローマ帝国に源流をもつさまざまな概念装置を忍び込ませることであった。

このことの説明を進める前に、ギリシャとローマとは、古代都市国家としての共通性をもちつつも、両者の間に大きな違いも存していたことを説明しておく必要がある。ギリシャのポリスは、何よりもそのきわめて強い精神的統一に特徴があった。アリストテレスの有名な「人間はポリス的動物である」という言葉は、まさにその表現であった。この言葉は、ポリスの運営に進んで参加して初めて人間は人間たりうるということを意味していた。それ以外の人間は野蛮人であり、本質的には動物と異ならない存在とすら見なされたのである。その意味でポリスの理想は、政治への参与、特に言論によって参与し、共同体のために戦う義務を引き受けることこそ人間の真の自己実現の場であると捉えられていたのである。

これに対して、ローマの都市国家(civitas)は、人間の自己実現としての政治への参与という観念をギリシャほど絶対視していなかった。ローマでは、すぐれた統治を行うこと、つまり技術としての政治への関心が早くからもたれていたようである。その中核は「インペリウム(imperium)」という概念であった。それは最初、軍隊に対する命令権を意味していたが、やがて統治権であるとか、統治の及ぶ領域であるとかを指すようになり、ついには支配圏の及ぶ範囲としての「帝国」を意味するようになった。ローマの共和政は、その構成員が兵役の義務をもつという点ではギリシャのポリスと同じく「戦士共同体」ではあったが、しかしインペリウムを誰かに委ねること、またそれを委ねるにあたつて複数の権力を相互に張り合わせる「混合政体」の仕組みをもったこと

によつて、ギリシャのポリスとは異なる特質を獲得した。インペリウムの概念はギリシャ世界では受け入れられなかった概念であり、その実践的な柔軟性にこそ意味があった。それこそが、ギリシャ都市国家が比較的短期間に衰えたのに対し、ローマを地中海の覇者に押し上げ、その支配を長期にわたらせた、いわば「支配の天才」としてのローマの本質であった。この概念によつて、ローマは都市国家としての性質を残しながら、かなりの開放性、柔軟性をもつことができ、やがて都市国家から帝政へと変質していくことすら可能になったのだった。

ギリシャのポリスでは公的空間への参加を意味する徳(virtue)の重要性が圧倒的に高かったのに対し、ローマでは市民の私的世界での自由(libertas)にもある程度の価値を認めていた。ギリシャにおいては人間は公的世界においてのみ真の人間でありえたが、ローマにあつては、公的なものが優先されはしたが、私的世界も一定の意義を与えられた。ギリシャでは公的空間としてのポリスしかなかったのに対して、ローマでは、社会と国家の区別が認められていたのである。

近代ヨーロッパの政治理論家たちは、ギリシャの政治哲学に刺激を受けながらも、その概念、思考法は常にローマ的なものに引き寄せられていった。そしてローマ的思考法こそが、中世の普遍的権威を否定した上で成立する自己完結的な政治体同士の間に、最低限の秩序をもたらしことを許したのである。それはローマが得意とした「法」や、ギリシャからローマ世界が引き継いだストア哲学の基本概念である「理性」とか「自然」といった概念によつて表現された。そこに、「国際政治」なき時代の「国際政治」、言い換えれば、「国際政治」の「原型」とも言うべき独特の秩序空間が成立したのである。

(中西寛『国際政治とは何か』)



歴史のプロセスとは決して直線を延ばすように進歩するものではない。ジグザグな進展でもない。それはいくつかの大きな経験や変動を経ながら先に進むものでもなく、すでに堆積されている経験の上に新たなものが積み重なっていくプロセスである。(中略)

そして、ひとたび歴史の重層性ということを認めたならば、次のことに思い至らざるをえない。それは、われわれは、結局、常にある特定の社会の中にあつて、ある特定の文化の様式のものでしか歴史を引き継ぐことができないということだ。普遍主義の旗印のもとに

押し寄せてくる西欧近代なるものと、われわれは調子を合わせることはできるし、実際そうしてきたつもりでもあるが、西欧的な意味で西欧近代を我がものとするのは、われわれには決してできない。

むろん、このような見方を批判する人は少なくない。「西欧的」近代などというものはない。「近代」は「近代」であつて、普遍的なものである。「西欧」にこだわる理由はどこにもない、そもそも西欧と日本を対立させるのが間違ひなのだ、と。

だが私には、この普遍主義は決定的に誤っているように思われる。歴史が重層的だとするのなら、われわれは決して近代という用語によって一括りにできるような普遍的世界へと収斂することなどありえないはずである。われわれは、どこまで行っても近代と前近代の混融を生きるほかない。そしてこの混融のあり方は、「ナショナルなもの」という文脈に依存するほかない。

近代的普遍主義者は、そもそも「ナショナルなもの」を持ち出すことは、排他的な国家主義へと対抗する第一歩であり、危険思想への導入口だと見なす。近代という普遍的文明によって初めて、平和的に人々は共存できると見なす。しかし、これも間違ひしている。普遍主義が排他的で暴力的であることはいくらでもありうる。普遍主義は、普遍であると自認する者の権利以外の一切を認めず、普遍性からの変異を排除しようとするものだからである。特殊なもの、

個別的なものを排除した上での普遍主義は、普遍という名の暴力の勝利に過ぎない。

これに対して、「ナショナルなもの」に立脚する立場、すなわちここで言う「シヴィック・ナショナリズム」は、「ナショナルなもの」であるがゆえにこそ、他の特性を尊重する。むろん「ナショナルリズム」が「ウルトラ・ナショナリズム」と化し暴走する危険に対して私も無自覚なわけではない。しかし、他者がなければ自己意識、つまりナショナリズムなど存在しないのである。他者を抹殺すればナショナリズムも無意味となるのだ。したがって、真に危険なのはむしろ普遍主義のほうであるように思う。それはすべてを同質化し、他者を排除しようとする。少なくとも「ナショナリズム」の危険性は常に唱えられ、いわばチェックされているのに対して、「普遍主義」の危険性はほとんど認知されていないであろう。だから、他者を契機とした自己意識、自己認識としての「シヴィック・ナショナリズム」こそが、グローバルな時代に要請されるのである。

今日、超近代文明(hypermodern civilization)としてのグローバルな普遍化が性急に世界を覆いつつある。同時に、それに対する展望のない反抗としての過激派によるテロが暴発している。そして、その両者にはさまれて、世界中の各地で「われわれ」の再定義が模索されている。その中心に「ナショナルなもの」の再構成という集団的なアイデンティティの模索がある。私には、イスラム過激派武装勢力によるテロリズムに与することができないのと同時に、西欧近代の性急な普遍化にも安易に与するべきではないと思われる。そして、今日、この普遍化を押し進めるのがアメリカだとすれば、アメリカニズムに対してどのように距離を置くか、ということこそが、われわれにとつての最大の課題と言わざるをえないであろう。

(佐伯啓思『倫理としてのナショナリズム』NTT出版)



概念化された風景のなかで若者たちはみずからの身体を概念化する。規格化されたスピードで移動することに慣れた若者たちは、老人のスピードで移動する人びとが規格外の存在であることに堪えられなくなるであろう。なぜ世の中はこれらに正常な機能をもたせるような装置を提供しているのに、それを使わないのか、と。

概念化した風景のなかで生きる人びとは、概念化された環境に適応していくから、そのような概念化した環境に適応する身体をもつようになる。ある理念のもとでつくられた風景に対して理念としての身体が設定され、それに適応することが徹底的に求められるからである。

空間風景のなかの身体は、こうして設定された空間の意味に対応するように訓練されていく。それは空間の意味を設定した設計者に要求されるかたちでの自己調整であり、自己訓練である。そこでは、身体は空間の価値に対応するように形成され、あるいは整形されていく。

風景の概念化と風景のなかで生きる身体の概念化とは相伴って進むであろう。概念風景のなかでひとは身体を概念化することで自由になる。たとえば、人びとは高齢者のようにゆっくりと歩くことから「解放される」。高齢者の身体は、健康な大人の身体の振る舞いの風景のなかに吸収されていくのである。

解放としての自由は都市設計の重要な課題であり、そこには、コンセプトのモチーフ、テーマ、ストーリー性といったものが重視される。これらは高次のコンセプトとして機能し、都市全体の特質を決定していく。高次のコンセプトが共有されると、世界の都市の類似化が生じるであろう。風景のグローバル化がこれによって推し進められる。

概念風景のなかの概念身体は、環境に適応することによって、もともと自然と人間の間にあった境界を除去する機能をもつであろう。

この除去は、風景と身体の間が存在する境界的不透明性の除去といってもよい。一定の意味空間はそのような空間の用途に沿った使用を要求し、そしてそれに見合う身体的振る舞いだけを許容す

る。こうして空間と身体境界にある不透明性は除去される。不透明な身体的振る舞いは、空間の価値にとって望ましくないものとされるのであり、そこに環境と身体との緊張関係が生じる。自己はそのような空間の意味に汲みつくされることによって、空間の提供する快楽を享受することができ、それと同時に、そのような要求への拒絶の自由を剥奪されるであろう。自由とは本来価値の強制のどこかない不透明な領域に成立するが、この空間の価値は身体の不透明性に対する不寛容をその大きな特色とする。

不寛容性によって、整形の緊張がひとに多くのストレスを加えるであろう。このストレスを解消するための空間と時間が必要なのだが、実は、このストレスの存在は、もともと風景の概念化によって引き起こされたものである。つまり、一定の価値概念による空間の意味づけによって身体が概念化されたための緊張である。空間の概念化は、一定概念によるゾーニングであり、このゾーニングは、無意味空間を排除する。いままで意味づけのなかった空間に意味とゾーニングを与えるので、身体は、この意味のなかで行動しなければならぬ。だから緊張が生じるのである。与えられた意味空間で要求される行為を遂行することで、ひとは緊張のなかを生きる。

（桑子敏雄『風景のなかの環境哲学』より）



最近のローティーン以下の子供たちは、あれほど教師が「個性」「自立」「自立性」を金科玉条のように主張しているにもかかわらず、目立つことを嫌う傾向が強いのである。彼らの間では、「他人に配慮ができる」気配り型が人気で、「場の空気が読めない」外し型が不人気だそうである。事実、うちの小学生の娘を見ていても、目立たないことの重要性を学習していると感じている。

「けっこうです」という言葉は頭が痛い。高文脈言語である日本語を象徴する言葉である。文脈を理解していないと、「イエス」か「ノー」かわからないのである。日本人でも文脈が微妙で、どちらかわからないことさえある。最近の若者の間で、この「けっこうです」に代わる言葉のひとつに、「ビミョー」があろう。明確な判断を避けているとの批判もあるが、若者たちの間では、共有している文脈のなかで、最近はとくに否定的な意見や感想をできるだけ述べたくないの

で、押し量れという高文脈言葉として使われている。まさに微妙なのである。

(中略)

これを巨視的にはどう捉えるべきか。戦後の一億総中流という平等幻想の上に築かれた企業という名の大きな帰属集団が、いままさに崩壊せんとしており、日本的小規模帰属集団への先祖返りが若者によつてなされようとしている、と受けとれないこともない。この意味においても、日本企業は若年層の企業への忠誠心(この場合は英語のコミットメントという語がふさわしい)を、どのように確保するの

かという大きな問題を抱えているといえる。このまま企業が、若者たちの企業へのコミットメントを喪失すれば、日本企業の企業力、ひいては日本の国力は衰退していくことだろう。したがって、若者の行動の変化が個人主義への移行につながるという議論は、明らかに論理が飛躍している。利己主義化(わがまま化)していることを個人主義化の根拠としているのかもしれないが、集団主義を否定すれば個人主義になるというような単純な二項対立的な問題ではない。日本と西欧の自我/自己構造の違いを考え

れば、これが乱暴な論であることは明らかである。

にもかかわらず、日本の原理の崩壊は個人主義への移行という極端な論を展開している人が多いのは、そうした論者自身が日本人の自己の前提構造の不安定さに苛立っているからと解釈したほうがよいのではないか。自己の前提となる役割構造が崩壊してしまうときによく見られる日本的な態度、まるで振り子のように「ゼロか百か」に極端に振れる姿勢が、ここにもあらわれているのである。そもそも、利己主義と個人主義を混同すること自体、日本人が西欧的な意味での個人主義原理に向かつていない証拠である。

繰り返しになるが、若年層の行動を子細に見ていくと、自己の相対的位置づけに基づく内向きの思考メカニズムに、構造的な変化は認められない。一見、個人主義原理へ移行しつつあるように映る若年層の行動は、自己構造にいたる手前のプロセスにおける、二つの領域での変化と解釈すべきなのではないか。

ひとつは、従来に比べて若年層の共通文脈の設定領域が狭くなったことと、コミュニケーション・スキルとその方法が変化したことである。もうひとつは、若年層の社会行動規範の通念が、これまでに比べてかなり変化してきたことである。戦後の官僚が築き上げた「一億総中流の平等幻想」がバブル崩壊によつて破綻し、「一億総よい子化」に息苦しさを感じる若者たちが出てきたことによつて、社会通念が変化し、よい意味での階層化が進んでいる。息苦しくなくいられる、自分のアイデンティティとなるワーキング・クラスの形成である。けつして裕福でもない家庭の子供がニートの多くを占められるほど豊かな社会では当然かもしれない。最近では「下流社会」とか「格差社会」という言葉がはやっているが、階層化をすべて悪と捉えるのは、社会主義的官僚か、おせっかいな進歩的文化人であろう。

(小笠原泰『なんとなく、日本人』による)



読解問題 7月4週分

問1 読解マラソン集1番「第二に、通常の人間の」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「事実」を観察するということは、その人間の私的体験であり、総体的な捉え方とは言えない。
B 「事実」を伝達するための言語は、「事実」を束縛してしまうことも否めない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「第二に、通常の人間の」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「事実」とは、自然とは別に人間が想像によって作り出すものである。
B 「自然科学的世界像」は、自然から「事実」を選び、構築したものを「現実」の世界として打ち立てているものである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「最近、本の真質、テキストの」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「万巻の書を読破した碩学」という言葉と「ものを考えない人ほどたくさん本を読む」という言葉は、別の意味である。
B 本の真質ということについて言えば、読者自身が知への愛を持って本を読むかぎり、どの本もホンモノになる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「最近、本の真質、テキストの」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 美そのものへの愛を欠いた美術品と、知への温かさを持たないニセモノのテキストはどこか類似している。
B ニセモノの本は、こちらがどんなに熱い思いを持って読んだとしても、ホンモノの部分を持ち得ない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「日本には室町時代から」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A かつては、技を競いあう建築のプロだった職人が、今では、マニュアルどおりに組み立てる技術を競い合うようになっている。
B 注文主が、職人に頼んで伝統的家屋を作るというやり方は、今でも田舎に残っている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「日本には室町時代から」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 社会の生産構造の変化は、伝統文化を壊しはしたが、人間の生き方の型は変わっていない。
B 新しい社会構造と新しい人間の生きる型は、古い倫理観の復活によって生みだされる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「日本人は記録魔だ、と」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 大思想を支えるような点的思考の言語には、弁証法のような考え方が向いている。
B 対話やコミュニケーションが重要だと騒がれはじめてから、日本人も、対話によって思考を展開することができるようになった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「日本人は記録魔だ、と」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本語は、思考の持久力には欠けるが、自由なひらめきがある。
B 日本語は、論理的ではないから、逆に創造的な性格を持っている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 8月4週分

問1 読解マラソン集5番「ウィリアム・ジェイムズのことばで」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 楽しかった過去を思い出しているときに起きる感情は「事実をかえりみている現在の感じ」でしかないため、実際に「楽しい」わけではない。

B 過去のことを「恥ずかしい」と思うときに起きる感情は、過去の感情が再生されたものである。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「ウィリアム・ジェイムズのことばで」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本人の精神構造の特徴は、その場その場でふさわしい切りれを使い分けられ、本来の自我に仮装をした状態でなら悪いこともできるという自我構造にあると言える。

B 日本で「しつけのいいお子さん」といわれるのは一貫した自我を持った、私の強い子ではなく、TPOに応じて自分を変えられる子である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「論文『忠誠と叛逆』（一九六〇年二月）の」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 現代は、政治体制の側もその批判者の側も、自分たちの正当性の裏づけとなる原理を持っていない。

B 普遍的理性にくくられない「個」というのは、反啓蒙的個人主義であるロマン主義が依拠した「個」とはいえない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「論文『忠誠と叛逆』（一九六〇年二月）の」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「個」として確立し、かつ適切な「政治判断」を可能にするためには、理想の「主体」への飛翔が不可欠である。

B 内側のイデオロギーのイメージを超えるためには、内側にいる自分を意識しながら外側との境界に立ち、内側の固定化を自らくずすことが必要である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「こう考えると、人類にとって」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 格差のない社会になれば、自己蔑視や他人への嫉妬に苛まれない社会になる。

B 知識産業に比べ、工業社会の富裕層は、短期間に大きな収入を得ることができた。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「こう考えると、人類にとって」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 二十世紀の大衆社会は、万人を見知らぬ存在に変えることによって、富の格差を感じにくくさせた。

B すべての職業に対する価値観を高めることによって、経済的な格差のない社会を作ることができる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「俗に言う重箱のすみを」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 歴史書を書く学者や研究者は、「イフ」的思考をすることと知識を増やすことによって、歴史を学んだり、楽しんだりしている。

B ギボンの『ローマ帝国衰亡史』は、ランシマンの『コンスタンティノープルの陥落』にあるような一級史料がなかったが故に、「なぜ」に肉迫することができた。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「俗に言う重箱のすみを」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 書物の魅力は、読者の「参加」によって生まれるもので、読者が参加するためには「なぜ」という知的作業が重要である。

B なぜ信長は本能寺で死なねばならなかったのかを考えることは、信長の政策の真意をさぐる上でヒントになる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 9月4週分

問1 読解マラソン集9番「しかしマキャベリの」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 古代都市ギリシャでは、ポリスの運営に参加する能力を持たない人間は野蛮人と見なされた。
B 古代都市ローマのインペリウムの概念は、人間の自己実現としての政治参与である。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「しかしマキャベリの」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ギリシャでは、私的世界の自由というものに価値を認めなかった。
B 中世の普遍的権威が否定されたあと、近代ヨーロッパの政治理論家たちが用いたのはギリシャ哲学の概念と思考法だった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「歴史のプロセスとは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 特定の文化の様式のもとでしか歴史を引き継ぐことができない以上、西欧的な意味で西欧近代をわがものとすることは不可能である。
B 近代の普遍主義の文明が平和的で、人々が共存できるというのは誤りである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「歴史のプロセスとは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ナショナリズムは、普遍主義に比べると、排他的で暴力的である。
B これからの時代の「ナショナルなもの」は、他者の存在があつてこそその自己意識、自己認識であるべきだ。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「概念化された風景のなかで」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A まず、風景が概念化されると、それに伴って、身体が概念化される。
B 概念化された風景の中で、概念にとらわれない振る舞いをすることによってひとは自由になる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「概念化された風景のなかで」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 環境と身体との間の緊張関係は、自己が空間の意味に汲みつくされてしまうことによって生じる。
B これまで意味づけのなかった空間が概念化されることによって、身体の緊張がなくなる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「最近のローティーン以下の」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本の若者の利己主義化は、西欧的な個人主義化だといえる。
B 若者の間で使われる「ビミョー」という言葉は、一種の高文脈言葉である。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「最近のローティーン以下の」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 裕福な家庭でなければニートを養うことはできない。
B バブル崩壊後に階層化が進んだのは、若者の行動が個人主義へ移行したからだ。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×